

参りける時、ふじに居候一柳監物弓の者一人打取候。爲褒美永樂貳貫文被下置。唯今本多上野殿に罷在樋口主計・あら澤源左衛門存知候。又直江山城に罷有時、奥州川またと申城において首一つ捕る。本多上野殿内返田彌右衛門存知候。又最上之内はたやと申城において首一つ捕る。井伊掃部殿に罷在富口九右衛門存知候。又於大坂五月七日首一つ捕る。松井八左衛門見申す。とあり。右樋口惣左衛門が子孫絶えたるか、今なしと云ふ。

○和田長右衛門傳話

長右衛門は、本多安房守政重の家士、家祿百五十石、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。和田長右衛門、本國奥州。初め岩瀬之城に罷在。此時田村之内船ひきと申城へ働きける時、首一つ捕りたり。正宗に居候橋本甲斐と申者存知候。又同かと澤と申城を攻落しける時、首一つ捕りたり。岩瀬に罷有三坂左馬助と申者存知居候。又田村の内下牧と申城へ岩瀬より働きける時分、味方敗軍仕ける處、五人もり返し鎧合せたり。此儀は岩瀬南岡に罷在松本善十郎・關野隼人存知也。とあり。和田氏の子孫絶えたるか、な

しといへり。

○三上源助傳話

源助は、本多安房守政重の家士、家祿百五十石、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。三上源助、本國遠江。初め松浦安太夫に罷有。伏見之城攻の時、首一つ捕りたり。爲褒美銀子一枚被與。此様子寺田久左衛門・因幡藤左衛門・蜂谷市兵衛存知候。又たか屋修理所に罷有ける時、左近親子之間弓矢に罷成、關本と申城に左近取籠りけるを攻めける時、をち浦田五郎左衛門与申者、我等と兩人裏門より一番に扉を乗り、城中にて我等鎧くみける處へ、大磯孫六五郎左衛門と組打致しける故、我等助け、五郎左衛門に首とらせたり。仕場之様子松平隱岐殿に居候小野半内、萩野佐齋に居候淺野新九郎と申者存知候。又喜田岡半兵衛・小笠原刑部組かく木田六助・つくら貫九郎兵衛も聞及び可申也。又越前にて久世但馬城責の時、たけや内よりは我等壹番に居候て敵と切合ひ、三ヶ所の手疵負ひたり。傍輩共立合ひ、敵打取候。如此様子は喜田岡半兵衛・かく木兵助・つくら貫九郎兵衛存知居候。又大坂に於て、五月七日首一つ

捕候。とあり。三上氏の子孫は絶えたるか、今なしといへり。

○後藤左馬助傳話

左馬助は、本多安房守政重の家人、種々嶋鐵炮之者なり。元和二年の武功書に云ふ。種々嶋鐵炮之者肝前後藤左馬助、奥州會津の内やな取と申城を正宗より被攻時、首一つ捕りたり。正宗内に罷在黑澤藤七と申者存知候。又同大崎之内宮崎と申城を正宗被攻ける時、首一つ捕る。正宗に罷有大塚助左衛門・岡田勘内と申者存知候。又大坂御陣五月七日に首一つ捕りたり。山口三右衛門存知候。とあり。後藤が子孫絶えたるか、今なしといへり。

按ずるに、本多氏は、元祖安房守政重、慶長七年利長卿に召寄られ、三萬石賜はり、同九年奥州米澤上杉景勝の家老直江山城守の養子と成り、米澤へ罷越し、後米澤を退き、慶長十六年八月金澤へ歸參し、三萬石元の如く賜はり、同十九年六月二萬石加恩ありて五萬石を賜はりたり。されば此の頃武功の諸士をば多く召抱えたりしこと知られけり。前顯の家士共は、元和二年の武功書に載せたる諸士の中

に、殊なる高名せし人々をば僅に載せたるのみなり。自餘の人々に尙武功の者あるべけれど今悉く記載せず。

或は曰く、本多元祖安房守政重の時、黒腰巾とて武勇の者を撰之、數十人召抱え探偵係りを申付く。其の身分は多分輕卒にて、黒きはゞきをはきて、六角の筋がね入りたる棒を持ち、所謂男達おとこたちのやうにて甚だ權威を張りたりと。右の子孫なるもの今に残りて、苗字を老田・角針などいへる是也と。又右六角の筋がね入の棒、今も本多氏に存在すといへり。又政重奥州米澤より歸參の時隨從し來りたる者共、後々迄其の子孫連綿するあり。皆奥州の地名を苗字とすといへり。按ずるに、角針といふものは、元和二年安房守政重より書出せる家士人数武功書の種々嶋鐵炮之者の中に、角針名左衛門・角針何右衛門・角針庄助・角針茂左衛門など數名見たり。右人数書に、給人馬上百三十三人、大小將之者五十五人、種々嶋鐵炮之者百五拾人、其の外鎧之者貳百人、小々姓八人、臺所者九人、常留守居之者三拾人、外に小者等惣人数都合六百六拾貳人とありて、此の時代は家士の中にも惡黨などもありし故に、黒はゞきなど呼べる目